

TA (交流分析) からみた内言領域の構造とはたらき(1)

小川 雅子

1. 外言化の過程における問題

湊吉正は、言語活動の形態を、話す・聞く・書く・読むの四つの外言による活動形態に「内的言語活動」を加えて、五形態としている⁽¹⁾。しかし、内的言語活動は客観的に把握されにくく教材化や評価の方法も見えにくいため、明治時代の「学制」以来、今日に至るまで国語教育の実践研究で注目されることは少なかった。そのため、「論語読みの論語知らず」のような結果になる教育の問題が常に存在していた。すなわち、客観的評価の難しい点には触れない言語記号の知識と運用に関する外言主体の指導になったり、論語のように考えなければならぬという教訓的指導になったりした。また、学習者の主体性は、その内実を問われることがなく、学習者は客体的存在として扱われることが多かった。現在、社会的にも指摘されている言語生活のさまざまな問題は、外言主体の国語教育によって記号の学習と言語生活の指導とを乖離させ、学習者を自己中心という主体者にしてきた結果であると考えられる。

言語生活を地盤とした国語教育では、言語記号の知識と運用に関する指導と、理解した内容を言語生活に生かす態度の育成という両者を、有機的に関連させる「学習者の内的言語活動に照応した対策」が、実践研究の対象として位置づけられる必要がある。そのために筆者は、外言習得後に形成される内言に対して、言語習得以前から存在する未分化な内的言語活動の場を内言領域と呼び、「個人の言語活動は内言領域における内的言語活動を主体とした自己表現の映像である」⁽²⁾と位置づけた。その上で、未分化な内的言語活動が外言化される過程にはたらく個人の心理的傾向と認識のレベルの問題が、国語教育の重要課題であることを指摘した。

具体的にハイムズのモデルで言えば、話題内容がメッセージの形態に記号化される過程の問題である⁽³⁾。語彙の選択も含めたメッセージの決定には、環境という文化的背景の他に、状況・相手・話題などに対する個人の認識や心理的状态が具体的な影響を及ぼす。そのため、話題内容が記号化される経緯に着目すれば、同じ話題内容が異なったメッセージとなる場合もあり、同じメッセージが異なった話題内容の表現である場合もある。したがって、学習者の実態を理解して、伝え合い通じ合う言語活動を遂行する能力を育てるためには、記号化の主体である個人の内言領域の構造とはたらきを明らかにして、学習者の内言領域を共有する手がかりを得ることが必要になる。

そこで筆者は、個人の価値観に基づく認識を三つのレベルに分け、学習者の反応のタイプを五分に分けて、学習者の認識のレベルと言語活動との関係を洞察する手がかりを示した⁽⁴⁾。これによって、教師は、学習者の外言や態度に惑わされずに、個々の学習者にとって必要な学習内容を

察知して、適切な選択と決断を行うことができる。問題は、内言領域において認識のレベルがどのように形成され、変容可能であるかという人間学的な解明である。

この流動的な内言領域の構造とはたらきを解明するために重要な手がかりを示してくれるのが、心療内科でも活用されている Transactional Analysis（以下、TAという）である。TAという言葉は理論と実践を備えたいくつかの学派を意味している。「それにもかかわらず、すべての学派にはエリック・バーンの仕事に遡る共通の考え方がある。」⁶⁾とされている。本稿では、エリック・バーンのTA理論を視点として内言領域の流動的な構造とはたらきを探り、言語活動にあらわれる認識のレベルと心理的傾向の形成と変容について考察する。

2. 自我状態の構造モデル

2.1 エリック・バーンとTA

エリック・バーンは、1910年、カナダに生まれた。後に米国の市民権を得て、精神分析専門医となるための訓練を受け始めた。1943年から4年間、バーンは米国陸軍の軍医部隊で約10,000人の兵士たちに行った検査を通して、自らの直感の正確さを確かめた。イアン・スチュアートは、バーンの1949年の論文（The Nature of Intuition）には、「後にバーンの考え方の中心となる三つの強調点が示されている」⁶⁾と述べている。第1は、直感は科学的研究や治療における妥当で効果的な観察の手段であると仮定して、専門医は絶えず自身の直感を客観的な観察と対比して吟味する必要があると考えたことである。第2は、理解することと言葉で表すことは異なるという結論を得たことであり、「真の理解は言葉を知ることよりも、むしろ、どう行動するかを知ることである。」と述べている。これをスチュアートは、バーンが精神分析の伝統から離れていったことを示していると指摘している。第3は、非言語的なシグナルが、言葉とは異なった「本当の」メッセージを伝えることがしばしばあることに気づいたことである。これが彼のコミュニケーション理論の基礎となった。

除隊後の1949年以降、精神医学の定期刊行誌に発表した数多くの論文で、バーンは精神分析の伝統的用語を使って自分の考えを述べている。しかし、1956年に精神分析医学会（psychoanalytic institute）の会員資格を申請して却下されたことを機に、バーンは独自の用語を使ったTAの論文を発表するようになり、1961年にはTAの最初の本、*Transactional Analysis in Psychotherapy* を出版した。1964年の *Games People Play* はベストセラーになり、15か国語に翻訳された。その後、バーンは、幼児期に自分で作った前意識の人生プランが人生脚本となるので、その脚本分析が本人の人生パターンを理解する鍵であり、心理療法で変容を達成する鍵であるという考えを深めて、*What Do You Say After You Say Hello?* をまとめた。

以上のような経験と過程を経てまとめられたバーンの理論には、「自我状態の構造モデル」「交流（やりとり）」「心理ゲーム」「人生脚本」という四つの柱がある。それらは素人にも分かりやすく説明され方法が示されている。本稿では医学的立場ではなく、医学的な立場が必要になる以前の、言語生活を地盤とした国語教育を成立させるという立場から内言領域の構造と働きを明らか

にするために、「自我状態の構造モデル」「交流（やりとり）」を中心にT Aの理論を考察する。

2.2 自我状態の構造モデル

「自我状態 (ego-state)」という用語は、バーンの造語ではない。バーンは、まず、ペンフィールドが、二つの異なった自我状態が互いに区別された別個の心理的状态として同時に意識を占め得ると論証したことをあげている。しかし、ペンフィールド自身は自我状態という用語を使ってはいない⁹⁾。バーンの研究の土台となったのは、ポール・フェダーンの「人は現在の自我状態を経験するか幼児期の自我状態を再体験することができる」という指摘であった。さらにフェダーンの弟子エドワード・ワイスは、フェダーンの二つの自我状態の他に、もう一つの自我状態、すなわち、精神的なものの存在を指摘した。これらの研究をふまえて、バーンは、脳はテープレコーダーのようにすべての体験を自我状態として保存していると考え、自我状態についてさらに二つの点を発展させた。

一つは、自我状態はフェダーンのいうように内的に経験されるが、それは一連の独特な行動にも現れると指摘したことである。バーンの独自性は、自我状態は一連の行動に現れるのでそれらは観察することができると指摘した点にある。二つ目は、パーソナリティの取り入れた要素、すなわち、ワイスの言う精神的なものの要素が、第3の自我状態のカテゴリーを構成すると主張したことである。

バーンはパーソナリティの構造を、図1の左側のように縦に積み重ねられた三つの円で示した。そして、それぞれの心とそれに関連した行為が自然に生じる状態を自我状態として、その構造を図1の右側のように示した。それぞれの自我状態をあらゆる口語的な言い方として、「Parent」(P：親)、「Adult」(A：成人)、「Child」(C：子ども)という用語を使用した¹⁰⁾。

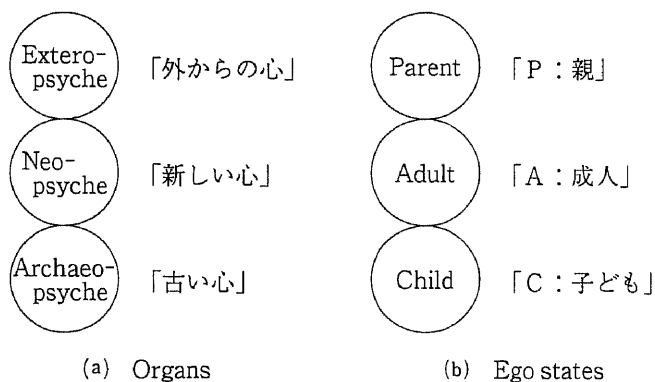


図-1

それぞれの自我状態のカテゴリーは次のように説明されている。

① P：ペアレント（親）

親的役割をした人たちを真似た一連の感情、態度、行動のパターンである。これをペアレント「P」と分類している。「P」の質的な内容は、目上の家族や親族・先輩・教師などの親的な人たちの影響によって、「偏見的なP」と「保護者的なP」の二つに分かれて形成されている。

「偏見的なP」は、他人の批判、叱責、非難をする傾向がある。必ずしも現実に即さない命令や指示などによって、自分の価値観を相手におしつける。このような「P」が強くなると、支配的で自信過剰で他人の「C」を威圧するような言動が多くみられるようになる。「保護者的なP」は、同情的、保護的、養育的で、子どもの成長を助ける母性的傾向である。他人が病気をしたり困っているような場合などは、積極的に面倒をみたり親身になって世話をしたりする。

「P」の重要な点は、規則などが本当に善であるか悪であるかに関係なく、親の判断で善または悪と判断されたものが真理として子供に記憶されることである。さらに、「P」のもう一つの特徴は、矛盾した事実がそのまま記録されることである。矛盾した記録は混乱と不安をひき起こすので、一方の親からよい記録を与えられても他方の親からそれと矛盾した内容を記録されれば、「P」の影響力は弱くなる。それは、成長するとともに、「A」（成人の自我状態）によって批判され反抗されることが出てくる。

親が子に対する最初の「P」は、声の調子や表情、撫でたり抱擁したりなどの非言語的な触れあいを通して伝えられる。やがて、言語による伝達が行われるようになる。「P」の影響がプラスにはたらくかマイナスになるかは、それがどの程度本人の現実感に合っているか、また「A」によってどの程度止揚されているかなどによって多様である。

② C：チャイルド（子ども）

個人の幼児期の名残である一連の感情、態度、行動のパターンである。過去のできごとから感じ取った内容や相手に対応して身につけた独自の反応様式が含まれている。「C」の自我状態は、「自由なC」と「順応したC」の二つに分けて考えられている。

「自由なC」は、親の躰の影響を受けていない、もって生まれたままの自然な姿である。このCは、本能的・自己中心的である。好奇心や恐怖心、生まれながらにもっている直感力・創造性・空想力などもこの内容に含まれる。「順応したC」は、親的存在の影響を受けて形成されている。親的な人の要求に対して、その愛情や信頼を失わないように身につけたさまざまな反応様式が含まれる。子どもは、多くの場合、「自由なC」を犠牲にして、自己の正直な感情を抑圧したり、劣等感を抱いたり、現実を回避したりする。この傾向が強くなると、人の顔色を窺ったり思ったことを口に出さないで内向するなどの態度になる。

③ A：アダルト（成人）

現実に適応した感情、態度、行動の自発的一連のパターンと言われている。「P」や「C」が、その人自身の過去から蓄えられたものであるのに対して、「A」は絶えず動きつつある現在に経験されている。「A」は個人の内にあるコンピューターのようなものでもあり、事実に基づいて情報を収集し整理統合して、過去の知識や経験によって評価し修正して行動に移すための資料とし、

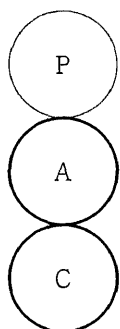
物事の可能性を推定する。「A」は理性と関係し、「P」の偏見や「C」の感情などにひきずられずに判断し思考する。「A」による人格の統合が、TAの目的の一つである。

2.3 自我状態の病理

「P」「A」「C」の三つはくっついて全体をなすと同時に、それぞれが独立した状態にあり、一つの状態から他の状態に精神エネルギーが移動するので、このような自我の境界には、三つの中の一つないし二つの内容を「除外 (exclusion)」したり、「P」と「C」が「A」を「汚染 (contamination)」したりする問題が生じる。

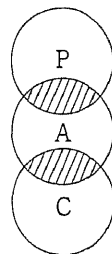
「除外」については、「P」「A」「C」のそれぞれが除外されるケースについて具体的な症状が示されている。例えば図2のように「P」が除外されると、他人に対する思いやりがなく自己中心的な行為になり、極端な場合は反社会的な行為になりやすい。「A」の除外は、現実を認識して思考し判断する「A」の働きが停止して「P」と「C」がありのままの姿で現れるので、精神病に近い状態とされている。

「汚染」については、「A」が「P」や「C」から汚染される場合に問題が生じる。「P」から「A」が汚染される場合の代表は「偏見」である。「C」から「A」が汚染される場合の代表は、子ども時代の経験や感情に支配されてしまう「妄想」の傾向である。図3のように、「P」「C」が両面から「A」を汚染している状態は、「P」の過保護や偏見によって人間的な成長を阻まれた「C」によって「A」が汚染されていることになる。すなわち、「P」に汚染されて自律性がなく、未熟な「C」に汚染されて現実性のある思考力に欠けている状態である。



「P」の除外

図-2



「P」と「C」による「A」の汚染

図-3

2.4 自我状態のカテゴリー

個人の言語活動の主体である内言領域に以上のような自我状態のモデルが考えられることを前提とすれば、個人の自我状態の実態が国語教育の地盤である言語生活の主要な問題として提示されることになる。個人の多様な実態は、自我状態をあらわす用語が一つの自我状態をあらわすのではなく、自我状態を含むカテゴリーをあらわしていることによってとらえられている。

三つの自我状態ではなく、三つの自我状態のカテゴリーがあるということは、例えば、「C」（子ども）という用語は、一つの自我状態のことを言っているのではない。それは自我状態のすべてを含むカテゴリーを示している。3歳の時の経験や8歳の時の衝撃など、そのカテゴリーの中のすべての自我状態は、一つの限定した特徴を共有していて、それはその人自身の幼児期における初期の体験の名残であると考えるのである。

しかし、バーンが三つの自我状態を前述したような図によって説明しているために、TAの多くの研究者は、バーンの短縮語をそのままコピーしそれを文字通りに解釈した。構造モデルは、「三つの自我状態、親・成人・子どもから構成される」というのが一般的な解釈になり、それが誤解と問題を生じさせるようになった点について、スチュアートは次のように指摘している⁹⁾。

このモデルの導入的な説明において、この簡潔な言い方は実によく役立つ。しかしバーンの理論を深く理解するためには、彼の完全な定義に従うことが重要であると信じる。

ここで指摘されているTAの研究者たちの理解は、「論語読みの論語知らず」の実態を端的に表現している。すなわち、実際には言葉や文章の説明では生きてはたらく理解は困難なはずのものが、解説者の一般的な分かりやすい解釈や説明により、現実とは乖離した知識によってすべてを了解したつもりになる。その結果、当初は実践の効果があがっても、やがて失われていく。

3. 内言領域における自我状態

3.1 TA理論の再構成

日本でTAを最初に心身医学的療法に活用したといわれている池見西次郎は、実際にTAを応用した結果、五つの収穫を報告している。国語教育の観点からは、次の2点の指摘が重要であると考え¹⁰⁾。

本法が心理療法にもたらした最大の貢献は、自分で使うことのできる道具を患者に与えるということである。大切なのは、精神分析では分析医が主人公であるが、TAでは患者が主人公である、ということである。…中略…

TAでは常に患者の現在のあり方を問題にし、それを修正しようとするものであり、…中略…従来の精神分析に不足している実存的な面（生き甲斐や時間の持つ意味など）が多分に含まれている。

患者を主人公として生き甲斐を見据えて現実問題を修正する考えは、学習者を主体とする国語教育の立場にも通じる。ところが、池見とともに2年あまり心療内科での実践を経験した杉田峰康は、TAについて「何ともいえず違和感を覚えるようになった。それは本法が精神分析の理論に基礎をおくとともに、米国式の人生論をふまえ、考案されたものであるため、現在の西欧文化、とくに米国社会の歪みを、そのままに反映した理論と技法に裏付けられているためであった。」と述べている¹¹⁾。TAでは「A」による人格の統合がねらいであり、西欧の競争社会の中で勝者となることに価値をおく「西欧的自我」が主導権を握っている。杉田はそこに、自然を無視する態度と自己中心性という、二つの問題点を認めて、「Aによる知性は両刃の剣であり、そのマイナス

面である自己中心性や、自然無視を常にチェックする必要がある。」と述べている⁽¹²⁾。このような疑問に対して、池見は、自身の切実な体験や西田哲学から「東洋的自我」をめざして禅の英知を取り入れ、T Aを再構成して実践した。その効果は、国際的にも評価されている。

池見が、患者の現実問題の解決のために人類の歴史性に目を向けて、T Aに「東洋的自我」の概念を持ち込み、禅を取り入れて効果をあげた事実は、言語生活を地盤とする国語教育を提唱した西尾実の認識にも共通している。西尾は、「人間の生きる態度によって形成される様式であり、その様式から発揮される美」を「中世的なもの」と呼んで⁽¹³⁾、中世までさかのぼって言語生活の態度を吟味し、「人間存在の根源的なありかたに立脚した新しい」⁽¹⁴⁾国語教育学を構想した。すなわち、人間が本来もっている可能性を十分発揮することができる言語生活を創造していくためには、不易な理を求めて歴史を遡る観点が必要であることを示したのである。

そこで、T Aにおける「P」「C」「A」のカテゴリーの特徴を筆者自身がこれまで使用していた用語に置き換えるならば、次のようになる。

「P」は、親的な人々から刻印された「固定観念」。

「C」は、子どもの頃から感情的に身につけた反応のしかたをあらわす「心理的傾向」。

「A」は、現在の思考や判断の主体である個人の「認識のレベル」。

前述したように、三つの自我状態のカテゴリーは独立しながらも一つのものであり、互いに関連し作用し合っている。個人の認識のレベルが変わると心理的傾向が修正されるし、また、心理的傾向が修正されると、固定観念の影響は弱まり、認識のレベルがさらに止揚されるということになる。しかもそれぞれにプラス・マイナス両面のはたらきが指摘されていることは重要である。

筆者が示した認識の構造⁽¹⁵⁾と比較して考えると、第一義的認識の機能は、「A」の健全なはたらきである。第二義的認識の機能は、健全な「A」のはたらきが環境主体の「P」や幼児期の刻印「C」のために弱められている状態であり、第一義的認識喪失の構造では、「A」が除外されたり汚染されたりしている自我状態ということになる。したがって、認識のレベルを止揚し、主体的な言語活動能力を発揮させるためには、「A」の働きの本質を理解し、それを除外したり汚染している「P」や「C」の具体的内容を洞察することが必要になる。「A」の働きの本質を理解するために明確に意識されるべきは、人間の脳のはたらきに着目した種の本質の問題である。言語生活を地盤とした国語教育では、人類の種の本質と交流して思考する観点を明確にして、互いに優劣無く共有できる「A」の自律性が意識されなければならない。

3.2 内的言語活動を支える「A」の強化

個人が言語生活において主体的な言語活動を実現するためには、「A」が「P」「C」をコントロールできることが必要である。しかし、学習者は、親や教師の価値観や期待に添うことが重要事になって自らの判断や行動ができなくなったり、自分自身の思いこみによって正常な言語活動を行えなくなっている場合がある。そこで、学習活動のはじめに、学習者の日常生活における言動から自我状態を洞察し、内的言語活動の正常化をはかる指導の工夫が必要である。

筆者がはじめて私立商業高校で古典の授業を担当した時、学習者の古典学習への抵抗によって一学期は授業にならず、お手上げの状態が続いた。自己反省の中で、「教科書の内容をうまく生徒に理解させるのが教育だ」と考えていた問題点に気づいた。そこで、2学期のはじめに、校庭から各自が抜いてきた1本の雑草をスケッチさせた。導入で、「日本最古の古典である『古事記』の中の神様は、一番はじめの国生みに失敗をしたが原因を確かめてやり直した」という話を紹介して、「これは美術の授業ではなく国語の授業であること。上手に描こうとは思わず、自分が見た通り感じた通りに自分の気持ちに正直に表現してみる。途中で何か思い浮かんだことばは、断片的でよいから、書き入れておくこと。」等を指示した。活動のまとめとして、スケッチに添えられたことばの良さを、古典短歌や現代俳句を引き合いに出しながら評価し、生徒たちにも互評させた。生徒たちは優劣の感情を忘れたように取り組み、これをきっかけに古典の授業が成立するようになった。TAからいえば、この学習活動は、「P」や「順応したC」に汚染されない「自由なC」の感覚を主体にした創造的自己表現を楽しむ経験を評価して、学習者独自の主体的創造性である「A」を強化した活動である。

作文の場合も、学習者には「何かまとまりのある立派なことを書かなければならない」「この問題についてはこのように書くのがよいのだ」などの思いこみが強いために、むしろ個性的な表現活動を阻害していることが多い。したがって、学習のはじめに、学習者の主体的な「A」の働きを弱めている「P」や「順応したC」から解放する導入が必要になる。すなわち、学習者の自己覚醒を学習活動の導入の柱にしていけば、学習者主体の授業が成立する。学習者の主体性が確立すれば、教科内容の習得のみならず言語生活が正常化されていく。

4. 交流分析と学習者理解

4.1 交流分析

バーンの独自性は、自我状態は一連の行動に現れるのでそれらは観察することができる、と指摘した点にある。これは、言語活動について言えばすでに指摘したように、個人の言語活動は内的言語活動を主体とした映像である、ということである。すなわち、言語行動にあらわれている相手の自我状態が了解された時、コミュニケーションによる理解はさらに深まる。

したがって、自己の三つの自我状態が、他者の三つの自我状態とどのように関わってコミュニケーションが行われているのかということが問題になる。バーンは、コミュニケーションを、人が使う自我状態によって分析した。これが交流分析である。交流（顔の表情、身振り、姿勢、声の調子など、非言語的なものも含む）のパターンを分析するのは、自分の他人に対する対応の仕方や他人の自分に対する対応の仕方についての理解を深めて、対人関係の在り方を意図的にコントロールできるようにするためである。

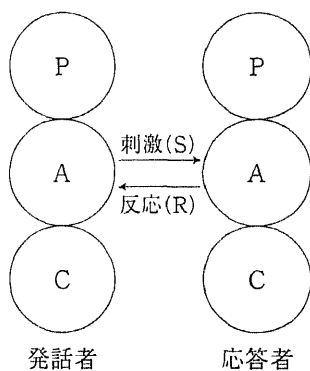
バーンは交流のタイプを、相補的交流・交叉的交流・裏面的交流の三つにわけた。さらに、それぞれのタイプから、コミュニケーションのルールを導き出している⁶⁰⁾。

相補的交流は、図4に例示されるように、話しかけられた自我状態が反応する自我状態になっ

ている交流を示す。ここから導かれるバーンのコミュニケーションの第1ルールは、「交流が相補的である限り……コミュニケーションは延々と続く可能性がある」というものである。

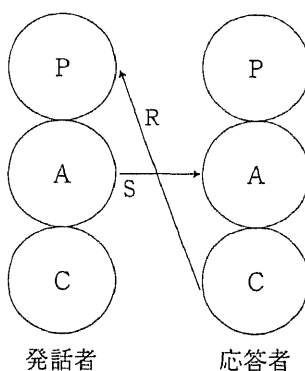
交叉的交流は、図5のように、話しかけられた自我状態と反応する自我状態が異なっている交流である。ここから導かれるコミュニケーションの第2ルールは、「交流が交叉すると、コミュニケーションは途切れる」というものである。

裏面交流は、図6のように二つのメッセージが同時に伝えられる。社会的レベルの交流では内容は言葉で伝えられているが、心理的レベルのメッセージは非言語で伝えられることが多い。これをコミュニケーションの第3ルールとしている。



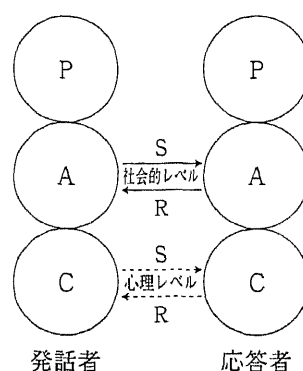
相補的交流

図-4



交叉的交流

図-5



裏面的交流

図-6

以上のような交流のタイプは、さまざまな人間関係の状況によって多様な現れ方をする。

相補的な関係としては、自分の「P」と相手の「C」の関係として幼児期の親子関係・先輩と後輩の関係・教師と生徒との関係、また、自分の「C」と相手の「C」の関係として仲良しの子ども同士・仲の良い夫婦・呑み仲間などの関係があげられる。自分の「A」と相手の「A」の関係は、さまざまなタイプの情報交換や質疑応答の関係が考えられる。

交叉の関係としては、謝罪の拒否・相手の意見の無視・忠告に対する反発・ユーモアを個人的非難と受け取るなど、ある反応を期待したのに予想外の反応がもどってくる交流の関係があげられる。

表面的には一見合理的なメッセージを発信しているようにみえて、その裏に異なった目的を隠し持っている裏面的関係の場合は、図6のように一つの交流にそれとは異なるもう一組の交流が隠されている交流のタイプと、一つの自我状態から表と裏の二つのメッセージが同時に発信される交流のタイプがある。前者は表面の社会的なレベルの交流の裏に心理的なレベルの交流が潜んでいるものであり、後者は自分の気持ちを遠回しに伝えるもので、他のことにかこつけて遠回しにあてつけをするような交流としてあらわれる。

4.2 教師と学習者のコミュニケーション

国語教育研究では、個人間のコミュニケーションを内的言語活動に着目して分析することはほとんどない。したがって、バーンの行ったコミュニケーションの自我状態による分析の成果は、内言を主体とした今後の言語活動の分析に重要な示唆を与えていると考える。

心療内科におけるコミュニケーションについて樋口正元が指摘している医師と患者の関係を、教師と学習者に置き換えると、国語教育における内言領域を主体としたコミュニケーションの重要性を指摘したものになる。くゝの中に、筆者が置き換えた言葉をいれる¹⁷⁾。

患者〈学習者〉の正しい診断〈理解や判断〉には、患者〈学習者〉の訴え〈話〉をよく聴き、それを吟味すること〈学習者の内言領域を理解すること〉が不可欠である。しかし、訴え〈自分本位な学習者の話〉ほどあてにならないものはなく、反面またこれほど軽視できないものはないということを臨床家なら誰でも知っている。〈教師は知っているだろうか?〉…略…長々しい、そして馬鹿馬鹿しいような訴え〈学習者の自己中心的な話〉(当人は真剣だが)をじっと聴いていることはなかなか難しい。正直嫌気がさしたり、時間が気になったりして、とかく上の空になりやすい。これでは患者の訴え〈学習者の内言領域を主体とした問題〉を正しく把握することはできない。

このように、個人の内言領域を推測しながら対話をしているのが心療内科医たちである。言語生活を地盤とした国語教育も、医学と同じく生きた人間が対象であり、学習者主体とは、相手の現状を主体とした対応によって個別的な内言領域の現状を把握しようとするコミュニケーションの態度であることを共通理解としなければならない。

5. まとめ

バーンの著書では、対象者に対する観察が詳細に描かれている。これはバーンが、非言語的なシグナルが言葉とは異なった「本当の」メッセージを伝えることがしばしばあることを自身のコミュニケーション理論の基礎としているためである。具体的な事例における人物描写の細密さには、バーンの観察眼と直感力の鋭さが十分に表現されている。

ところが、バーンの研究の解説書や翻訳書では、そのような具体的な描写の鋭さや細密さは捨象されて、理論的に整理されていてわかりやすい。これは、言語記号の理解が第一義として共有されている証である。バーンに学ぶ者の多くは、バーンが示した対象者の内言領域を鋭く洞察する経験や直感を求めるのではなく、それを整理した言語的成果を学ぶので、やがて効果はあがらなくなって行き詰まるのは当然のことである。

しかし、池見が眼前の対象者に対処する直感をはたらかせて「東洋的自我」を取り入れて効果をあげたように、治療者自身が自らの直感をはたらかせて方法を工夫する時、バーンと同じ認識がはたらき、同様の効果があらわれる。すなわち、「結果としてあらわれた外言を主体として求めれば人々は本質を見失い、内言領域に着目して探究する時は方法が異なっても本質をつかむ」というのが理である。したがって、教師にとっても、言説として国語教育の方法を知ることよりも、

学習者や教育内容に対する自らの観察眼と直感力を養う実践意識が第一義になる。

さらに、TAによる自我状態の分析で明らかになったことは、学習者は環境の影響や自身の経験を通した思い込みなどのさまざまな刻印によって、すでに自ら自分の能力を発揮できない心理的傾向になっているということである。しかも、教師のあり方によっては、「偏見的なP」の影響を強くして、主体性を失わせる可能性があるため、教師には学習者の内言領域の構造とはたらきを洞察して、学習者の「A」を覚醒させる教材化を工夫することが求められる。

このように内言領域の構造とはたらきに目を向けることは、単に学習者の心理に着目した学習者論や指導方法論の問題ではない。それは同時に、専門領域としての「国語教育学」を成立させるための教科内容に関わる課題である。すなわち、日本語を始めて文字にあらわした太安万呂の表記の苦心に共通する、言語の記号化と解読の過程を対象とする言語表現活動と理解の問題である。さらに、冒頭に述べた、「言語記号の知識と運用に関する指導」と「理解した内容を生活に生かす態度の育成」の両者を乖離させず、有機的に関連させる「学習者の内言領域に照応した指導の工夫」をすることは、個々の教師が自らの「A」をいかに止揚させるかにかかっている。

注

- (1) 湊吉正 (1987) 『国語教育新論』明治書院 p. 2
- (2) 小川雅子 (1999) 「内言領域に着目した国語教育の観点」『月刊国語教育研究』第332号 日本国語教育学会 pp. 42-49
- (3) Hymes, D. H. (1962) 'The Ethnography of Speaking' in T. Gladwin and W. C. Sturtevant, eds.: *Anthropology and Human Behavior*, Washington, D.C., p. 25
- (4) 小川雅子 (2001) 『「生きる力」を発揮させる国語教育』牧野出版 pp. 110-117
- (5) Stewart, I. (1992) *Eric Berne*, SAGE Publications, p. 130
- (6) 同上書 pp. 3-4
- (7) Berne, E. (1961) *Transactional Analysis in Psychotherapy*, New York: Grove Press, p. 17-18
- (8) 同上書 p. 31
- (9) 前掲書(5) p. 26
- (10) 池見西次郎 (1973) 『続・心療内科』中公新書 p. 60
- (11) 杉田峰康 (1976) 『自己分析』創元社 p. 269
- (12) 同上書 p. 21
- (13) 西尾実 (1961) 『中世的なものの展開』岩波書店 p. 154
- (14) 西尾実 (1951) 『国語教育学の構想』筑摩書房 p. 35
- (15) 前掲書 pp. 111-112
- (16) Berne, E. (1964) *Games people Play*, New York: Grove Press, pp. 28-32
- (17) 樋口正元 (1992) 「訴え(症状)の吟味」『心療内科』金原出版 p. 2